

共同研究室

昭和四五年度第一回研究会（五月十五日）

▼テーマ 家計調査の代表性について

報告者 関 弥三郎

報告要旨 統計は経済の現状分析に不可欠の資料であるが、統計の欺瞞性、統計の誤用、濫用を批判される場合がしばしばある。統計は複雑な諸規定の総合である現実に、その概念的制約を無視して利用することから統計の誤用、濫用をもたらす場合が多く、また統計的概念を考慮せずに経済理論的概念のみで統計を解釈し利用せんとして統計の欺瞞性の非難を浴びせる場合が多い。経済分析に利用度の高い家計統計について、これらの点を明らかにすることは大切な事柄である。そして、家計調査はその性質上標本調査によって行なわれねばならぬことから、統計的概念の妥当性の問題だけではなく、更に標本構成の方法の妥当性——すなわち標本の代表性——の問題も重要である。こゝでは後者についてその基本的な問題を

吟味することにする。

第二次大戦後わが国では任意抽出による標本構成の方法を用いて、非農林漁家世帯を対象とする総理府統計局の「家計調査」と農家世帯を対象とする農林省の「農家経済調査」の二本建て家計調査が行なわれているのであるが、前者の代表性について川上敏郎氏のすぐれた批判がある。川上氏は「家計調査」の代表性について資料を用いて種々検討を加えた後に、この調査の基本的な問題点として (i) この調査が都市生活者全体の生活の実態（家計収支）の平均的把握を目的としているために、家計の理論生計費的な解明や階層別の実態把握が犠牲にされている、(ii) 家計簿の記入という手数のかゝる調査であるために、平均的把握という狙いも達成できないでいる、(iii) これらの欠陥から生ずる誤りは利用者側の統計の限界を無視した乱用によって一層拡大され引伸ばされている、と述べ、家計調査としては戦前の方式（典型的な層をいくつかとらえてこれを追跡し、その結果から全体の傾向を推定する方式）の方が適切であり、また理論的にも正しいと言っている（『都市問題』一九五八年四月）。川上氏が批判した「家計調査」の代表性の欠陥は、37年の大改正によって相当改善されたのであるが、以上

の基本問題に対する批判は依然として妥当すると考えられる。

川上氏は家計調査としては戦前の有意選択による調査の方が、今日の任意抽出による調査よりもすぐれているとしているのであるが、しかし、今日の家計調査の資料の利用状況からみる時、単純に有意選択法の優位を主張することはできないと考えられる。現在家計調査は国民生活の実態の把握を目的として家計収支と消費の構造、水準及びその変化を調査しており、その結果は消費者物価指数の作成、国民経済計算のための基礎資料、最低生活費、消費関数の研究、更には企業需要分析のための資料としても利用されている。これらの家計調査の結果の利用において、統計理論的には二つの認識目標の異なる場合を区別することが必要である。第一は歴史的事実としての家計現象の具体的記述結果として利用する場合（記述目標）であり、第二はそれが得られた特定の時所に限定されないで一般的に妥当する値として利用する場合（法則目標）である。

記述目標の場合は特定の時点でわが国の世帯を全数調査することに於て得られる値が必要であり、それは世帯主の職

業、年令別、世帯人員数別、収入階級別、地域別等、種々の世帯の特性別に与えられることが必要である。これらの値を標本調査の結果から推定するのであるから、世帯の特性別にみた標本集団の構造が全部集団の構造に近似することが、標本推定値の精度を高める上から大切である。このような標本は任意抽出法による時は——標本があまり小さくない限り——得られる可能性が高いが、有意選択法による時は極めて困難であり、そのことは戦前と戦後の「家計調査」の資料の比較から伺われる。任意抽出法による場合記入拒否による標本の上層偏倚やサンブルローションによる時系列比較の困難等の欠点があるが、それは先の有意選択法に対する任意抽出法の優位を覆す程のものとは思われない。故に記述目標の場合は任意抽出法がすぐれていると考えられる。

次に法則目標の場合は家計現象の中に伏在する規則性を表わす値が必要であり、それは特定の観察結果が蒙る偶然の偏倚を除いた正常値でなければならぬ。それを得るためには家計現象にとつて重要な条件を同じくする世帯を多数観察しその結果の算術平均を求めることによって、個々の世帯に於て多様なその他の条件の攪乱的作用を相殺、消去することが必

要であるが、それは世帯の数が多し程より正常値に近いと考
えられるから、特定の時所に於て実在する世帯だけではなく、
同じ条件の下に在る無限の世帯を仮想し、そこでの算術平均
値を実際に調査して得られた算術平均値で推定するものとし
るのである。この場合は重要な条件が同じであつて、個々の
世帯の家計の相異は無意な偶然変動とみなし得ることが必要
であり、そのような標本を得るためには任意抽出法よりも有
意選択法の方がすぐれていると考えられる。

今日の家計調査の任務からして先ず記述目標の統計需要に
応ずるように任意抽出法で標本を構成すべきであり、すると
標本が大きい限り世帯の特性による分類結果は同時に法則目
標の統計需要をも満たし得るのであらう。更に必要ならば特別
に再集計を行つて所要の結果を得ることも可能であらう。と
ころが、有意選択法による時は法則目標の統計需要によく適
合し得ても、記述目標の統計需要に充分応えることは困難で
あらう。

以上の要旨の報告に対して、討論の過程で経済の統計分析
に於ける二つの認識目標の区別の妥当性、偶然性の意義につ

いて種々有益な批判が与えられた。